

## こころの交流こうりゅう

碁ごの別称べっしょうに「手談しゅだん」というのがある。わたしの大好きなことばである。だいず

口くちで物ものを言いわなくても、打うち下おろす一い手い一い手いが雄弁ゆうべんにお互たいの心こころの中なかを語かたっているわけで、沈黙ちんもくが深ふかければ深ふかいほど、手談しゅだんはいよいよ奥おく深ふかいものとなる。

世よの中なかには、往々おうおうにしてペラペラしゃべりまくりながら碁ごを打うつ人ひともいるが、わたしどもに言いわせれば、よくもまあ気きが散ちらないで碁ごが打うてるものだと思おもう。碁ごは、やはり沈思黙考ちんしもっこうし、想成そうなってから初はじめて碁石ごいしを一ひと粒つぶだけつまむべきものだ。

とはいえ、いつもにぎやかに碁ごを打うっている人ひとに対たいし、急きゅうに静しずかにしろと言いったところで無理むりな話はなしだ。ちょうど、ガード下したに住すんでいた人ひとが静しずかな山奥やまおくに引いん越こしたようなもので、あまり静しずかで調子ちょうしが狂くるう意味いみもあるだろう。しかし、ガード下したはあくまで仮かりの住居じゅうきよであり、人間にんげんらしく住すむのには良い環よ境かんが必要ひつようであると思おもう。碁ごはやはり、「手談しゅだん」でなければなるまい。

この手談しゅだんという語ごが、最もも身みにしみて感かんじられるのは、外国がいこくへ行いって碁ごを打うつときである。こちらがうまい手てを打うつ。心こころの中なかで、

「どうです。うまい手てでしょう。ちょっとお弱よわりになられたのと違ちがいます

か。」

とニヤニヤする。相手も頭あいて あたまをかいて、

「弱よわったなあ、日本にほんのプロは恐おそろしいことをやってくるわい。」

と応おうじている。たまに向むこうがうまい手て うを打うてば、こちらがウーン困こまったと

いう風情ふぜいで二十秒にじゅうびょうほども考かんがえるふりをする。相手は

「どんなもんだい」

というふうせ のに背だいいばを伸いばして大威張いちじかん にじかん あいてりである。こうして一時間か二時間お相手

をするのだから、相手あいての気心きごころはもちろときん、時には性せい格かくまでわかってしまうこ

とがある。この点てん、そこらあたりえきしゃの易者たしさんよりはよほど確たしかで、アッとい

う間まに百ひゃくねん年の知ち己きができてしまう。碁ごを知しっている人ひとの天与てんよの恩恵おんけいだ。

まことに、碁ごは、それ自体じたいが一つひとの言語げんごであると思おもう。

なかやまのりゆき いご せかい いわなみしよてん  
中山典之『囲碁の世界』岩波書店より